

選考をふりかえって

「小説部門」 高校生の部 選考長 小川洋子

今年はいつになく、恋愛を真正面からとらえた作品が目立っていたように感じます。幅広い分野に才能を発揮された田辺先生ですが、なかでも恋愛小説は最も多くの読者に愛されたジャンルかもしれません。誰かを愛することは、いつどんな時代にあっても、永遠の謎であり、その謎に近づくためには、どうしても文学が必要なのだと思います。

最優秀賞、中原和奏さんの「ゆらぎ」は、少女二人の微妙なすれ違いと、互いに相手を求めるひた向きさが胸を打つ作品です。特に、チツルの清廉さの前で、自らの汚れた気持ちのおのく、わたしへの心の震えが、痛みとともにこちらに伝わってきます。そして何より秀逸なのが、プールの水の使い方です。水の揺らめきや、冷たさが、彼女たちの危うさを映し出しています。どんなに傷ついても、どこから光が差し、若い二人を照らす。そんな希望がラストに表れていました。

優秀賞、新村夏生さんの「跳び越えて、向こうへ」は、選挙という素材が新鮮でした。主人公が木の枝で地面に線を引くシーンが忘れられません。心地よい、さわやかな風が吹いてくるようでした。

もう一つの優秀賞、石井萌花さんの「きみとなり」は恋愛小説の王道とも言える作品で、登場人物たちの真つずぐな視線が印象的でした。シャンプールの香りと、夏の夕方の匂いがする二人を、応援したくなります。

佳作は、草薙匠さん、大沼芽生さん、木村まり杏さんの三人です。「森の魔女」は、瓶にたまる美しい液体のイメージが、魅力的です。最後、魔女の視点に移り変わるあたり、驚かされました。

「棒」には他の作品にはない、独特の軽やかさとユーモアがあります。ユーモアは文学にとって大事な要素です。

「まっしろとまっくろ」の主人公が見せる、よりよい自分を求める気持に、大いに共感しました。思春期にしか書くことができない、貴重な作品です。